

# 心清浄の展開

——『維摩経』の「清浄な仏国土の建設」の意味を考える——

菅 沼 晃

はじめに

「善男子よ、菩薩は仏国土を浄らかにしようと欲したならば、自らの心を浄めるよう努めなければならぬ。なぜかという、菩薩の心が浄らかになることによって、仏国土は浄らかとなるからである。」

（『維摩経』 仏国品）

「困窮一〇年 炎暑の夏 電気・ガスなし 父子孤立

さいたま市の住宅街で一五日、七六歳の無職男性が熱中症で死亡した。生活保護を受けないまま電気やガス、電話を解約し、近所とも交流せずに二人で暮らしてきたらしい。命を保つ糸が細った生活に、炎暑が牙をむいた。多くの高齢者が「熱死」するこの夏、貧しさの中で孤立する人びとをどう救うのか。」

（『朝日新聞』二〇一〇年八月二〇日）

「どこかに、こんな社会はないものか。」

ひとは、それぞれ、いろいろな活動——市場での労働のみならず、ひとや自然、文化や芸術との多様なつながりのなかでなされる行いや在りよう——をとおして、いろいろな種類の価値を生み出し、評価されている。

ひとは、誰しも、独立・責任・自尊などの観念とその社会的基盤を手放すことなく、「健康で文化的な生活を維持」するために必要な資源（所得・財・サービスなど）を十分に得ることができる。」

（アマルティア・セン／後藤玲子著『福祉と正義』東京大学出版会、一三五頁）

私たちが住む仏国土は今どうなっているのか

二〇一〇年の夏は記録的な猛暑で、真夏日が九月まで続いた。この猛暑は地球規模のものらしく、この年の六月初旬のころ、筆者はたまたまモスクワに行ったが、この地でも気温は三〇度を遙かに超えていた。我が国では、同年五月三一日から八月一五日までに熱中症により救急車で病院に運ばれた人は全国で三万一千七九人で、高齢者が半数以上を占め、死亡者の数も過去最高だったという（『朝日新聞』同）。

ここで問題なのは地球の温暖化もさることながら、電気やガスを止められ、夜は真つ暗になる生活を余儀なくされ、熱暑には抗しきれずに死亡する人が、現に存在するということである。一人暮らして誰の援助も受けられず、孤独の内に死んで、数ヶ月経ってから発見された例もある。このような現象から、現在の我が国の社会を「無縁社会」と呼ぶ人もいる。この無縁社会という言葉ほど反佛教的な言葉はないのであるが、現実の社会を考えると、妙に説得力のある言葉であるようにも思える。しかも、これらの現象が特殊な例ではないということにショックを受けない人はいないのではなからうか。

また、百歳を超える長寿者の増加を誇る我が国において、年金問題を発端に、高齢者の現状を確認することをおろそかにした結果、高齢者の行方はわからなくなっているというケースも少なくないことも明らかにされた。家族の一員であるはずの者がどこに居るかわからないというのも、常識では理解しがたいことであり、日本の社会は一体どうなっているのかと思わざるを得ない現実がある。

これは高齢者だけの問題ではない。「格差社会」と呼ばれる社会の出現が、すべての問題の根底にあることは誰にも否定できないであろう。格差社会は分配の不平等による低所得者層を生み出し、「成果主義」「競争原理」、「勝ち組」、「負け組」、「ワーキングプア」「フリーター」などの言葉が無造作に作られ、何の痛みも感じることなく、極めて普通に用いられるようになった。自由競争は人間社会を活性化する有力な原理であり、この競争に勝ち抜いて「勝ち組」に入れるかどうかは、その人の「自己責任」である。このように競争することによって生産性は向上し、人間も社会も豊かになってゆく。数年まえまでは、このような主張が政治家たちによって叫ばれ、市場主義とか、新自由主義とかいわれるものが人間に幸福をもたらす唯一の原理であるかのようにもはやされていたのを、私たちは忘れていない。

しかし、現在、日本の社会に格差・貧困、ひいては人びとの心の荒廃をもたらしたのは、この市場主義そのものであるとする「市場主義の崩壊」を説く経済学者たちが登場し、「市場主義の失敗」のメカニズムが明らかにされている。

多摩大学教授の中谷巖氏は『資本主義はなぜ自壊したのか』（集英社 二〇〇八年）の「まえがき」なかで、次のように明言している。

「グローバル資本主義は、世界経済活性化の切り札であると同時に、世界経済の不安定化、所得や富の格差拡大、地球環境破壊など、人間社会にさまざまな「負の効果」をもたらす主犯人でもある。そして、

グローバル資本が「自由」を獲得すればするほど、この傾向は助長される。

二十一世紀は、グローバル資本という「モンスター」にもっと大きな自由を与えるべきか、それともその行動に一定の歯止めをかけるべきなのか。

当然のことながら、新自由主義勢力はより大きな「自由」を求める。グローバル資本が自らを増殖させるための最大の栄養源だからである。しかし、さらなる「自由」を手にしたものは、まさにその「自由」によって身を滅ぼす。結局のところ、規律によって制御されない「自由」の拡大は、資本主義そのものを自壊させることになるだろう。」

中谷氏はかつて小渕恵三内閣の「経済戦略会議」の議長代理を務め、「規制緩和」、「市場原理」、「自己責任」などの旗振り役を演じていたのだが、この著において自らの「転向」を表明し、「人間の欲望の飽くことのない充足」に歯止めがかけれなかったことが、現在の状況をもたらしたとし、神仏を融合した日本人の宗教観の積極的評価にまで及んでいる。利己心にもとづく個人の利益追求行為は「見えざる手」によって、社会全体の経済的利益とつながるといふ古典的理論がもはや現実性をもたないとすれば、人間を特定の行動へと突き動かす欲望をどのように制御するかという人間そのものの問題に帰着するのであり、ここに佛教の人間観との接点があるということができようであろう。

もとより佛教は人間の内面の問題をあつかう宗教であり、現代社会の格差や不平等などの問題に直接的に解決策を提示できる筈はないが、人間の欲望追求が主要問題とされる場合には、自利利他、すなわち「個人の利益」と「他人の利益」を対立的なものとしえない考え方は、重要なポイントとなるのではないかと思われる。そこで、本稿では「清浄な仏国土の建設」を標榜する『維摩経』によって、何かヒントになるものはないかを、探ることにしたい。特に「清浄な仏国土」或いは「仏国土の清浄」という場合の、「清浄」とはな

にをいうかということに絞って、手がかりを見つけておきたい。

### 『維摩経』という経典の特色

数ある大乘経典のなかで、『維摩経』には他の経典と比べていくつかの点で際だった特色が見られる。なかでも重要なのは、この経典の主人公として大乘の教えを説くのがヴィマラキールテイ (Vimalakīrti, 維摩) という在家の家長 (gṛhapatī) であることと、その活躍の舞台がブッダ在世当時のヴァイシャリー (Vaiśālī) と呼ばれていることである。

ブッダの時代、古い経典のなかで「十六大国」と言われているように、北インドには多くの国(都市)があった。そのなかで、Sangha あるいは Gana とよばれる或る種の共和政体をとる国(或いは種族)があり、ヴァイシャリーはこのような政体をとるリッチャヴィ (Rīchavī) 族の首都であった。ヴァイシャリーは、現ビハール州の州都パトナの北方にある貧しい農村であるが、ブッダの時代には自由商業都市として栄え、ブッダの最もお気に入りの土地でもあった。ブッダの最後の旅を描いた『大般涅槃経』(Mahāparinibbana-sūtra) では、涅槃の地クシナガラへの途中、ブッダはこの地で最後の雨期を過ごし、この地の美しさを賛嘆している。

『維摩経』の作者は、かつてリッチャヴィ族の青年達が行き交い、彼らがガニカーと呼ばれる豊かな遊女アームラパーリーとブッダの招待について争ったという故事などを心に思い浮かべ、より現実味のある舞台として設定したのであろう。このヴァイシャリーの町には、公共の施設らしいものもあり、教育の場、遊技場、酒場さらには遊郭もあり、人間の社会として現在と余り変わらない町のように、経典は描いている。

維摩は、このようなヴァイシャリー市の豊かな商人であり、同業者の組合 (saṅgha) の長 (śreṣṭhin) で

あり、政治の場にも、教育の場にも、何かことがあれば顔を出し、酒場や遊郭にも出入りして市民たちを指導する“顔役”のような人物とされている。

『維摩経』で浄仏国土という場合、あるいは“娑婆世界”というときは、このようなヴァイシャーリーの町中がイメージされているものと思われる。この經典には、この娑婆世界の他に、理想の仏国土として、香積如来の香積国などが説かれているが、娑婆世界との対比においてあげられているのであって、問題にしているのは娑婆世界そのものであることは間違いないであろう。そこで、この娑婆世界に関して、そこに住む人びとが「自心を浄める」とはどういうことが、当面の問題とされるのである。

## 一 自心を浄めるとはどういうことか

心清浄ということを考える出発点となるのは、過去七仏が共通して受持したといわれるブツダの戒めの偈文中の「自浄其意」という概念であろう。一般には「迦葉仏波羅提木叉」と言われるものがよく知られ、『ダンマパダ』では次のように記されている。

「すべての悪をなさず 善を行い

諸悪莫作 諸善奉行

自心を清めること これが諸仏の教えである」

自浄其意 是諸佛教

sabbapāpassa' karaṇaṃ kusalass' upasampada

sacittaparyodapanam etam buddhāna sasanam. (Dhammapada 183)

この偈文中 sacitta-pariyodapanam と paryodapanam は、サンスクリット、及び佛教混淆サンスクリットでは paryavadapayati (pari-ava-da ④ Causative: to purify completely) から派生した

pariyavādapāna (completely purification, F. Edgerton: Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary p.334) であり、svacitta-pariyavādapāna は、明らかに「自らの心を完全に清めること」の意味であることがわかる。これは心の本質が清浄であるという原理を述べているのではなく、それぞれの人が自分自身の心を自ら清めよ、というブツダによる戒めを意味しているのである。後の心性本浄論において心性本浄ということが、或る種の実在論的な見方からとらえられるようになって行くなかで、svacitta-pariyodapāna の原意に立ち戻ることが極めて重要であると思われる。

このような「自心を清める」ということを前提にして、『ダンマパダ』の冒頭の偈が説かれる。

「ものごとはみな 心を先とし、心を主とし、心より成っている

もし人が汚れた心によって 語り 或いは行うならば

それより その人には 苦しみが従う (車を牽く牛の) 足に車輪が従うように。(1)

ものごとはみな 心を先とし、心を主とし、心より成っている

もし人が清らかな心によって 語り あるいは行うならば

それより その人には安楽が従う 影が(身体を) 離れないように。(2)」

ここでは、「汚れた心によって」(manasa paduṭṭhena) と「清らかな心によって」(manasa pasānena) とが対比されているが、この場合も「自心を清める」という努力によって「清らかな心になった心でものごとを行うならば」の意味であろう。

これにたいし、原始經典の中には、心性本浄説の原型となる記述の在ることが明らかにされている(西義雄著『原始仏教に於ける般若の研究』三三二頁〜五〇二頁)。同書では原始經典中の心に関する記述を、種々心を現すもの、染浄和合の心を表すもの、心性本浄とするものに分類し、多くの実例をあげておられる。そのな

かで、「この心は本来清浄であるが、本来的なものではない煩惱によって汚されている」という原理的な記述の他に、染浄和合の心を述べるものとして、「比丘たちよ、心が汚されることによって衆生は汚され、心を清めることによって衆生は清まる。」(citta-sankilesa bhikkhave satva sankilissanti, citta-vodana satva visujjhanu. SN. III. pp.151-152)という記述があり、これは冒頭で引用した「もし清らかな仏国土を建設しようとしたら、自らの心を清めなければならない」という『維摩経』の主張に直接つながるものとして重要である。

この心性本浄説は、後の大乘仏教の思想や信仰の中でも常に重要なテーマとされた。たとえば、『六祖壇経』に記されている五祖弘忍門下での、神秀と恵能の呈偈も、仏教思想の流れから言えば、「心性本浄とそのはたらき」ということにどちらが徹底したかが問われている、と言ってよいのではないかと思われる。

それでは、自性清浄といわれる心が、どのようにしてはたらき始めるのか。「もし清らかな仏国土を建設しようとしたら、自らの心を清めなければならない」とは、どういうことか。自浄其意ということが、具体的にどのようなようにして清らかな仏国土の建設につながって行くのであろうか。

## 二 「自浄其意」と「心の空無」

心清浄の問題を考えると、今はあまり読まれていない書物とは思いますが、山口益博士の『心清浄の道』(理想社 昭和三〇年)は重要な示唆を与えてくれる。博士の自坊で行われた佛教講座の講義をまとめたもので、百余頁の小篇ながら、「七仏通戒の偈」の「自浄其意」が大乗菩薩の自利他行へと展開して行くプロセスを、一般市民のために簡潔に説き明かしている。「自浄其意」を柱とした佛教の入門書として、現在でも価値を失っていない著であると筆者は考えている。



この著の中で、博士は、「自浄其意」とは結局は「心の空無」ということであり、この「心の空無」こそ、大乘菩薩の利他行のモチベーションであることを明らかにされている。ここで言われる「心の空無」とは、一般に「心を無にする」といわれるような意味ではなく、『中論』第十章「火と薪に関する考察」(「燃可燃品」)で明らかにされるような、能所の空、すなわち、自我と対象の縁起・空が覚知され、心が能所のとらわれを離れて自由になったことを表している。博士は言われる。

自浄其意といふ語の内容を究明して行くと、その語は、普通考えられているやうに、「我々には清らかな心性・心の体があつて、その清らかな心が濁っているから、その濁り・汚れをとり払ふて清浄にして行くのである」といふやうな意味ではなくて、心の清浄とは、言亡慮絶心行寂滅であるから、心を空無にするといふことになる。(同書六十七―八頁)

さしあたり現在のわれわれといふものは、常に先ず、火に喩へられる能取を抽象して「我れ、己れ」であるとなし、この我れ、己れが、優先的に存在するために所取なる客観世界を、「己れの物、我所」として抽象して執へ、その「己の物・我所」を所有し、支配するのは、「己れ、我れ」であるとして、己れの存在に駄目を押しして己れを主張する我執を強調する。(中略)それらは何れも、能所が抽象的実体的論的に先づ的に捉へられた思想から出発しており、従つて、能所の始体といふものが無であるとする、無始空、すなはち、縁起甚深に背違せる邪執である。(中略)自浄其意、自らその心を浄くするとは、縁起甚深の道理を体認して、さういふ己れを主張する力ずくの有我見を空して無くすことである。(同書、九十一―一二頁)

山口博士の文を長々と引用させていただいたが、この「能所を離れた心の空無」ということこそ「自浄其意」であるということは、『維摩経』のテーマそのものである。少なくとも「心性本浄」ということを原理

論的にとらえて「心性本浄なるが故に我が心清し」とするだけでは、そこに何のはたらきも生まれてこないであろう。中国禪の五祖弘忍門下で、神秀と六祖惠能によって師に提示された偈文の評価も、この文脈からすれば「自浄其意」ということについての、「心性本浄説にもとづく原理的理解」と「心の空無の体認」との相違、ということになるのではないかと思われる。

さて、『維摩経』の原題は Vimalakṛti-niṛdeśa であるが、Vimalakṛti とはヴィマラチの Vi-mala は「汚れを離れた」（文法的には vigata-mala）の意味であり、玄奘は無垢称と訳している。山口博士は vimala を「清浄にするはたらき」、purification, cleaning」であるとされ、kṛti は「聞かえて評判になる」の意味であるから、Vimalakṛti という言葉は、「清浄にするはたらきが、十方世間に聞こえるということ」は、世間を清浄化し世間を済度するということで、仏道を成ずるという意味」（『維摩経仏国品の原典的解釈』『山口益仏教学文集下』春秋社 四百二十七―九頁）という解釈を示しておられる。

### 三 「自浄其意」はどのようなはたらき始めるのか——『維摩経』「仏国品」の課題

『維摩経』の清浄な仏国土の建設というテーマは、この經典の基礎をなすテーマとして、まず「仏国品第一」において取り上げられる。

ここでは、維摩と同じリッチャヴィ族の青年ラトナーカラ（Ratnakara 法蔵）の「菩薩が仏国土を清めるとはどういうことか」という問いに対してブツダ自身が次のように答えている。

「善男子よ、衆生という国土が、菩薩の仏国土である。なぜかというと、菩薩は諸衆生の幸せを増進させる必要がある限り、仏国土をとるからである。菩薩はどのようにして諸衆生を鍛錬するか、というこ

とに従って仏国土をとり、諸衆生がどのような仏国土に入ることによって仏智に達するか、ということに従って仏国土をとり、諸衆生がどのような仏国土に入ることによって、聖者に等しい機根を生ずるか、ということに従って仏国土をとる。それはなぜかという点、善男子よ、諸菩薩の仏国土とは、衆生を利益するためにあるものだからである。たとえば、ラトナーカラよ、誰かが空き地に何かの建物を建てようとすれば、思い通りに建てられるであろうが、しかし、虚空には何かの建物を建てることも飾ることもできない。まったく同じように、ラトナーカラよ、菩薩はすべての存在は虚空に等しいと知って、衆生を成熟させるために、このような仏国土を建設したいと願うところに従って、それぞれが仏国土を建設するのであるが、菩薩は虚空に仏国土を建設することはできず、飾ることもできないのである。」

(VN. p.9, 711-12)

ここでは、仏国土なるものが、現実のこの社会であることが先ず明かされる。「虚空に建物を建てることはできない」という比喻は、大乘の菩薩が建設しようとしている国土はこの世とは別の所にあるのではなく、私たちが今生きているこの国土、この社会であることを示している。清浄な仏国土の建設は、ただ私たちの心の中で行われるのではなく、現実の世界において、人間の心も体も環境も、その一切を含めた意味においてなされなければならないのである。

それでは、「菩薩の仏国土とは衆生の国土である」とは、具体的に何を表すのか。「仏国品」では、続いてこの經典で目指される仏国土が次のように説かれる。

「菩薩の仏国土とは意欲という国土である。菩薩が悟りを得たとき、その仏国土には、偽りのない誠実な衆生が生まれるからである。」(āsaya-kṣetram bodhisattvasya buddha-kṣetram, tasya bodhi-prāptasya asaitha amāyavinah satva buddha-kṣetra upapadyante.)

「善男子よ、菩薩の仏国土とは強い決意という国土である。菩薩が悟りを得たとき、その仏国土にはあらゆる善根資糧を積んだ衆生が生まれるからである。」(adhyāśaya-kṣetram kulaputra bodhisatvasya buddha-kṣetram, tasya bodhi-prāptiśāya sarvakuśala-sambhāra-upatīṭh satva buddha-kṣetre sambhavanī. VN. p.9, 114-18)

「意欲という仏国土」*asāya-kṣetra* といううちの *asāya* は、通常は「意樂」と漢訳される語であり、「何かをしようとする意志、意向」「心に欲すること、心の願い、望み」「或る目的を達成しよう」と念願する」との意味で、浄仏国土を建設しようとする菩薩の意志と願いを含む語と言つてよいであろう。「positive thought」という英訳は誠に適切である (R. A. F. Thurman: *The Holy Teaching of Vimalakīrti*. p.16)。

鳩摩羅什は、おそらく「偽りのない誠実な衆生」(詔わざる衆生) という文脈からと思われるが、これを「直心」(じきしん) と訳している。素直で正直な、濁り気のない、真つ直ぐな心というほどの意味で、何か爽快感を与える訳語であるが、ここはやはり、自浄其意から発して清らかな国土を建設しようとする菩薩たちの意欲と願いをあらわす言葉でなければならぬであろう。なお、*asāya-kṣetra* という複合語 (*samāsa*) は「意欲という国土」、或いは「菩薩の意欲がある国土、菩薩が意欲をもっている国土、その中で菩薩の意欲がはたらく国土」(*yasmin bodhisatvasya asāyo vartate tat kṣetram*) と解するのが經典の趣旨である。

「強つ決意」*adhyāśaya* は増上意樂と漢訳される語で、「意向」*asāya* よりもさらに強い意志・願いを表している。鳩摩羅什訳は「深心」であるが、この場合も人の心の奥にある深い心というのではなく、外に向かう強い意志である。英訳も “high resolve” としている。「意欲」も「強い決意」も、菩薩の自浄其意にもとづいて浄仏国土を建設しようとする意欲・強い決意であり、そのような意欲・強い決意を誓願とするのが菩薩という存在のすべてである、と經典は言っているのである。清らかな国土をどのようにして建設する

かというテーマの最初に、このような菩薩の意欲・決意を置くところに『維摩経』という經典の明確な意図が如実に示されている。

ついで、菩薩の仏国土は、加行 (prayoga) 菩提心を発すこと (bodhicitta-ūpāda) 布施 (dana) 戒 (śīla) 忍辱 (kṣanti) 精進 (vīrya) 禅定 (dhyāna) 般若 (prajñā) 四無量心 (catvāry apamāṇāni) 四摂事 (catvāri saṃgraha-vastūni) 善巧方便 (upāya-kauśalya) 三十七覺支 (saptaśiṃśad-bodhipakṣa) 回向心 (pariṇāmanā-citta) 八難所の除去を説くこと (astakṣāna-praśama-dēśana) 自らは戒律の条文を守って他人の過失を諱らなごこと (svayam śikṣāpadesu vartamana parāpaty-acodanata) 清らかな十善業道 (daśakuśala-karmapatha-pariśuddhi) のそれぞれが行われることごとく、とされる。

このように、仏国土のあり方について述べてから、菩薩が菩提心を起こすことよって意欲が生まれ、意欲よって強い決意が生まれ、乃至、回向によつて方便が生まれ、方便によつて仏国土が清浄となる (buddhakṣetra-pariśuddhi) と説き、続いて論理的には逆に、つぎのように説かれている。

「国土が清らかであることにしたがって、(そこに住む)衆生も清らかとなる。衆生が清らかとなることにしたがって、その智慧も清らかとなる。智慧が清らかとなることにしたがって、(そこで行われる)説法も清らかとなる。説法が清らかとなることにしたがって、知恵のはたらきも清らかとなる。智慧のはたらきも清らかとなることにしたがって、自心も清らかとなる。」(yadīśi kṣetra-pariśuddhis tadīśi satva-pariśuddhīh/yadīśi satva-pariśuddhis tadīśi jñāna-pariśuddhīh/yadīśi jñāna-pariśuddhis tadīśi deśana-pariśuddhīh/yadīśi deśana-pariśuddhis tadīśi jñāna-pratīpatī-pariśuddhīh/yadīśi jñāna-pratīpatī-pariśuddhis tadīśi svacitta-pariśuddhīh/VN, p. 11, 4117-21)。

ここでは、自心の浄化から国土、すなわち社会・環境の浄化へと進む方向だけではなく、逆に国土の浄化

から自心の浄化へという、双方向からの浄化作用があつて始めて完全な仏国土となる、とされるのである。このようにして、『維摩経』中で最もよく知られた

「それゆえに、善男子よ、菩薩は仏国土を清らかにしようと思ふならば、自らの心を清めるよう努めなければならない。なぜかという、菩薩の心が清らになることによつて、仏国土は清らかとなるからである。」(tasmat tarhi kulaputra buddha-kṣetram parisōdhayitukamena bodhisatvena svacitta-parisōdhane

yatnaḥ karanyāḥ/raṭ kasya hetoh/yādīsi bodhisatvasya citta-parisuddhis tadīsi buddhakṣetra-parisuddhiḥ sambhavati/VN. p.11, 122-p.12.11)

という言葉が述べられるのである。「自らの心を清める」とは、このように菩提を求める心が清らかな国土建設への意欲、ひたすらなる願いとして展開してゆくことであり、その意欲・強い決意が特に重要視されていると言つてよいであろう。

#### 四 支え合う社会を目指す仏国土

『維摩経』で説かれる清らかな仏国土とは、遙か彼方にある理想の国(浄土のようなもの)ではなく、菩薩の国土建設への意欲・強い決意によつて、この世で実現されるべきものである。しかし、社会に於ける各種の不平等や格差是正などの問題にせよ、地球の温暖化、環境保全の問題にせよ、現実的には一人の意志や意欲、決意だけではどうにもならないことも事実である。「京都議定書」にしても、世界のすべての国が批准して始めて効果が期待されるのであつて、或る巨大な国が膨大な量の有毒物質を排出し続ければ、地球の環境は全体として汚染されて行くことは目に見えている。現実には、この人間の国土は「清らかな国土」ど

ころか、日に日に汚されて行くがごとくである。

しかし、そうではあっても、菩薩の自浄其意にもとずく清らかな仏国土建設の意欲・決意は重要であり、この願いが多くの人びとの共感を得て国や社会を変ええる力となることも、事実である。

「仏国品」には、ヴァイシャーリーのリッチャヴィ族の青年ラトナーカラが、同じくリッチャヴィ族の青年たち五百人の先頭に立ち、おのおの一本の傘を手にしてブツダが滞在しているアームラパーリー園を訪れる場面がある。彼らリッチャヴィ族の青年たちはアームラパーリー園のブツダの許に至り、ブツダを礼拝してからそれぞれが手にしていた傘をブツダに捧げるや否や、それらの傘はブツダの威神力によって一つの七宝でできた巨大な傘に変わった。しかも、そのなかに、三千大千世界のすべてものが、スメール山から太陽、月、星、山、河、さらには十方世界の諸仏の説法の音声までも現されていた、というのである。

『維摩経』のこのような表現は、ブツダや維摩の威神力とか神通力とかの偉大さを現そうとしているのではなく、このようになりにかなり大胆な比喩的表現は、一つの重要なテーマを述べようとするときの、この經典特有の方法と言つてよい。經典作者の豊かな詩的想像力によって、最も重要な教えを現す場合には、不思議な出来事とか比喩、或いは対句の使用などが好んで用いられる。逆説的表現の多用もこの經典の特色である。

さて、リッチャヴィ族はヴァイシャーリーを都とする部族であるが、五百人の青年達は同じリッチャヴィ族の富豪の子と言っても、顔かたちも違えば個性も心境も異なるのは当然である。しかし、ここでは、一人一人がブツダの教えを聞こうと願い、ブツダを敬い尊敬する意志を伝えるために、その手に傘を持ってラトナーカラの後に従ったのである。因みに、ここで「傘」というのは「傘蓋」(chatra)のことで、インドでは国王や貴人、高位の僧などに侍者が背後からさしかけるために用いられるものである。

程度の差はあるかも知れないが、リッチャヴィ族の青年達のブツダの教えを聞きたいという熱意を象徴す

るのが傘である。そこで、五百人が手にしていたときは別々であった傘が、ひとたびブツダの手に渡るとただ一つの巨大な宝蓋となったということは、五百人のリッチャヴィ族の青年の心がブツダにおいて一つになつたことを意味している。佛教教理の上からは、現実の人間は千差万別であるが、ブツダの心はそれらのすべてを受け入れるはたらきをもっていること、すなわち、一と多、絶対と相對、統一と雑多が、ブツダの立場に立てば一体となる、ということになるであろう。しかし、ここでは、「清らかな仏国土の建設」というテーマのもとに、この傘の比喩を考えなければならぬ。

現在の世界において、清らかな仏国土の建設を阻むものは数え切れないほどある。世界は国家間の利害の対立、領土をめぐる抗争、その他民族や宗教などが複雑に絡み合つて互いの憎しみが増幅され、殺し合い、傷つけあつて武力衝突に至ることもある。その結果、苦しむのは底辺に暮らす人びとであり、難民キャンプの暮らしぶりや飢えた子供たちの姿をテレビで見たととき、何とかしなければいけない、と思わない人はおそろくないであろう。そのような一人一人の思いが、すべてを覆い尽くす巨大な傘となるとき、始めて難民も貧困もなくなる、とこの比喩は言っているのである。『維摩經』の説く「清らかな国土の建設」とは、菩薩、すなわち私たち一人一人が自浄其意の意欲と揺るぎない決意を持ち、自らの思いを大きく広げて一本の傘を作つて行くことによつて、始めて成し遂げられることになるであろう。

## 五 菩薩の自浄其意のはたらきは娑婆世界でどのような形をとるか

『維摩經』では人間存在を「本性として清浄」としとらえていることはすでに見た通りである。しかし、現実のこの娑婆世界は人びとの飽くことのない欲望と自我の意識に満ちあふれている世界であることも、私



たちは経験的に知っている。実は、『維摩經』という經典も、このことを十分に意識した上で書かれていると言つてよいと思われる。

まず、「仏国品」において、ブツダによつて「仏国土を清らかにしようとする菩薩はまず自心を清らかにしなければならぬ」という教えが説かれたとき、仏弟子のシャーリプトラは「この世はどう見ても汚れていて、清らかには見えない」と言う。それにたいして、(一)シャーリプトラ自心の意欲が清らかになつていないので仏国土が不浄に見える、(二)ブツダは劣つた人びとを成熟させるためにこの世界を欠陥があるように見せている、と説かれている。しかし、これも佛教教理からの決まり切つた解説であり、この經典の見方は現実に即して、娑婆世界に住む人間を厳しい目で見ている。

この經典の『香積品』では、香積如来 (*gandhottanakuṭo nana tathagatah*) が芳香で教えを説くという香積国 (*sarvagandha-sugandha*) との対比において、娑婆世界の本質が述べられている。經典は言う——香積国においては香積如来による言葉の説法はなく、太陽の光や木々のそよぎ、衣服、食事、山、河、樓閣、遊園など、すべてのものがブツダのはたらきをしていて佛教の真理を説いている。

それによつて、この娑婆世界の衆生については、維摩は「優れた者たちよ、これらの(娑婆世界の)衆生は制御しがたいものたちである。これらの制御し難いものたちに対しては、ブツダ(娑婆世界のシャカムニ仏)は、頑固で制御し難い者を懲戒するための教えだけをお説きになつた。」(*durdamaḥ saṃpuruṣāḥ ime sarvāḥ/tesāṃ durdamānaṃ satvānaṃ khātunika-durdama-damatha-kathāṃ eva prakāśayāti/VN, p.95, II.21-22*) となっている。「制御し難いものたち (*durdamaḥ*)」とは「馴らされ難い、訓練され難い」の意味であり、「頑固で制御し難い者を懲戒するための教え」(*khātunika-durdama-damatha-katha*) とごうごうの「頑固」(*khātunika*) は剛強、頑愚などと漢訳される語、「懲戒」(*damatha*) は「懲戒・刑罰」、「自制、克己」の意味で用いられる

語である。鳩摩羅什は「此の土の衆生は剛強にして化し難きが故に、仏は為に剛強の語を説きて、以て之を調伏したまう。」と訳して、「剛強」の語にすべての意味を含ませている。

要するに、この娑婆世界の衆生は、頑固、頑迷で、欲張りで、嫉妬深く、他人を恨み、自我意識ばかり強く、ひとの言うことを聞かず、誠に度し難い。それゆえ、ブツダは「これは心・口・意の邪な行為であり、これはその報いである」とか、「これは墮地獄の行為である」とか、「怒りや愚痴の心を起こしてはならない」などの激しくきつい言葉を説いて、度し難い人びとを導こうとしている、というのである。因みに、「頑固で制御し難い者を懲戒するための教えだけ」といううちの、「だけ」(eva)とは、この世界はすべて自性として清浄であるとされるが、現実には娑婆世界の衆生は欲望の塊のようなあり方をしているから、經典には戒めや訓戒の言葉だけが記されている、という意味であろう。

そこで、このような剛強な衆生を成熟させるためにはブツダさえも激烈な言葉を使わざるを得なかったことを踏まえて、『維摩経』では、「菩薩は非道を行じ、悪魔となつて衆生を導け」と言われるに至る。

『維摩経』「仏道品」では、文殊師利の「仏陀の道を行くにはどうしたらよいか」という問いに答えて「マンジュシユリーよ、菩薩は非道を行くとき、そのとき、ブツダの教えに達することができる。」(yada mañjuśrīḥ bodhisatvo' gatigamanam gacchati, tada bodhisatvo gatiṅgato bhavati buddha-dharmesu/VN. p.76, 73-4)と言われる。具体的にはどういつ(ことかとの問いには「菩薩は五無間業の道を行きながらも、悪意・殺意・敵意はない。地獄の道を行きながらも、すべての煩惱の塵を離れている。畜生道を行きながらも、無知の暗黒を離れている。」(nirayagatim ca gacchati, sarva-rajah-kleśa-vigataś ca bhavati/niryagyonigatim ca gacchati, vigata-tamo' ndhakarāś ca bhavati/VN. p.76, 76-8)と説かれ、以下、あらゆる世間的な悪行、邪な行為を行ひ、戒律を破り、偽善や阿諛追従の道を行きながらも巧みな方便によるはたらきをしている、と言う。そ

して、ついには、「菩薩は煩惱の道を行きながらも、本性として清浄であって畢竟して汚染されていない。また、魔の道を行きながらも、すべての仏説については異説に従わない。」(Kleśa-gatim ca gacchati, prakṛtipariśuddhaś ca bhavaty ahyantasankliṣṭāh/māra-gatim ca gacchati, apara-pratyayaś ca bhavati sarva-buddha-dharme/VN. p.77, 114-5)と云うように、魔となつて娑婆世界に姿を現すのである。

この經典では「不思議品」にも、不可思議解脱の境地にある菩薩のはたらきを述べる中で、「大徳マハーカシーユヤパよ、十方の無数の世界において魔のはたらきをしている者は、殆どすべてが不可思議解脱にある菩薩であつて、彼らは巧みな方便によつて衆生を成熟させるために魔のはたらきをしているのである。」(yāvanto bhādanta-mahakāśyapa dasāsu dikṣv aprameyeṣu lokadhātusū māra maraṭvaṃ karayanti, sarve te yadbhūyaś acintyavimokṣa-pratiṣṭhita upāya-kaūśalyena satva-paripācanāya māraṭvaṃ karayanti/VN. p.62, 117-19)と説いている。

非道を行ずるとか、悪魔となるとか、いささか極端にすぎる表現のように見えるかも知れないが、これは単なる逆説的な言い方ではない。娑婆世界において、頑固で制御し難い人びとをブツダの道に導くには、高い立場に立つて教えを説くというような方法は意味を持たず、悪そのものと同次元にあることが先ず必要とされるのである。悪を行う者を一段高い善の立場から引き上げる(救済する)、それによつて罪を犯した者は救われて行くという考え方は、ここでは否定される。それは、能所の空、心の空無ということからすれば、菩薩の正しい方ではないからである。非道を行ずるといふ舞台が、能所の空無に徹した菩薩によつて、くるっと一回転して仏道を歩く場面が変わる、ということはこの經典は期待しているのである。

## 六 「清らかな仏国土の建設」をめぐる諸問題

『維摩経』の目指す「清らかな仏国土の建設」について考えるとき、「差別と無差別」「平等と不平等」など、重要なテーマが残されており、現実の社会の貧富の格差やあらゆる意味の不平等などとの関連において、佛教的な視点、或いは『維摩経』からの見方からの論究がなされねばならないであろう。ただ、佛教の教理がそのままの形で現実に生かされることを短絡的に求めてはならないと思われる。たとえば、『維摩経』の「入不二法門品」では「不二とは何か」が論じられるが、この場合も「一切の存在は真如であるから貧乏人と金持ちは不二である」などという不二論は、現実的にはまったく意味をもたないであろう。「二にして一」ということを「悟りの心境」とするだけではなく、これによって現実の格差や不平等の問題に対して、佛教からの何らかの新たな見方を示すことが必要とされるのである。

「平等と不平等」などの諸問題は次の機会に考えることにして、最後に拙稿の論旨をまとめておくことにしたい。『維摩経』という經典の主たる課題は、不可思議解脱とよばれる悟りに入った菩薩のはたらきとしての「清らかな仏国土を建設」ということであった。そのためには菩薩自らの心を浄化すること、すなわち「自浄其意」が先ず必要とされた。大乘佛教においては、自らの心を清めることは能所のとらわれを離れること、すなわち、心の空無を意味し、菩薩はその心の空無にもとずいて清らかな国土の建設に向かうのであるが、その際、清らかな国土を建設しようとする意欲や固い決意の重要性が強調された。高度成長期の日本においては、全国の河川は産業廃棄物によって極度に汚染され、どす黒く濁っていたが、国を挙げての努力によって現在はほとんどの河川が魚の棲めるほどに回復している事実を見れば、「浄化しようとする意

欲・決意」がいかに重要かがよくわかるであろう。かくて、菩薩はこの世の浄化に取り組むのであるが、『維摩経』はこの娑婆世界に住むものたちを「頑固で導き難いもの」として、それにふさわしい激烈な言葉や非道を行ったり魔のはたらきをするなどの強行手段を用いて、頑固で強欲な人びとの「我あり、我がものあり」とする生き方を改めさせようとするのである。

人間の「我あり、我がものあり」という欲望が資本主義社会を作り上げてきたことは事実であろう。その人間の欲望が、物質を中心とする文化や生活しやすい環境をつくる原動力となったことも認めざるを得ない。しかし、人間の飽くことを知らない欲望追求も「見えざる手」によって制御されるといふ期待を裏切つて、人間の自我意識の過度の膨張と富を独占しようとする所有欲のほうもない拡大が、今日の格差社会を出現させたということは、経済学にはまったく暗い私たちにも理解できる。

このように見れば、今、必要なのは我我所を離れるという理念であり、「願わくは衆生とともに」という共生の理念であることは明かである。このところ、ようやく「平等主義に基づく寛容」(アマルティア・セン)、「お互いさまの社会に向けて」(白波瀬佐和子『生き方の不平等』)、「共生経済」(内橋克人)、「まず我々は「欲望の抑制」ということを学ばねばならない」(中谷巖)という主張が提示されるようになった。それぞれの理論を踏まえた主張であるが、詰まるところ「連帯・参加・共同」などと言われるような「衆生とともに」の思想であることには相違がない。これらの主張に、さらに佛教の立場から、人間の内面の豊かさをも含んだ思想を加えて行けないものであろうか。

本稿で使用したテキスト、および参考文献

『梵文維摩経』 VIMALAKIRITINIRDHSA (略号 VN) 大正大学出版会

- The Teaching of Vimalakirti (Vimalakīrīnīdeśa), by Etienne Lamotte, rendered into English by Sara Boin Oxford 1994
- The Holy Teaching of Vimalakirti A Mahayana Scripture by Robert A. F. Thurman Delhi 1991
- 『新国訳大藏経』文殊經典2、『維摩経』高崎直道訳  
山口益『心清浄の道』理想社 昭和三十六年  
山口益『山口益仏教学文集 下』春秋社  
大鹿実秋『維摩経の研究』平楽寺書店  
アマルティア・セン 大石りら訳『貧困の克服——アジア発展の鍵は何か』集英社新書  
アマルティア・セン 池本・野上・佐藤訳『不平等の再検討』岩波書店  
アマルティア・セン 大庭・川本訳『合理的な愚か者 経済学Ⅱ倫理学的探求』勁草書房  
アマルティア・セン 徳永・松本・青山訳『経済学の再生 道徳哲学への回帰』麗澤大学  
中谷巖『資本主義はなぜ自壊したのか 日本再生への提言』集英社  
内橋克人『共生経済が始まる』朝日新聞出版  
白波瀬佐和子『生き方の不平等——お互いさまの社会に向けて』岩波新書  
柄谷行人『世界共和国へ』岩波新書  
橋木俊詔『格差社会——何が問題なのか』岩波新書  
根井雅弘『市場主義のたそがれ 新自由主義の光と影』中公新書  
高橋祥友『中高年自殺——その実体と予防のために』ちくま新書  
山脇直司『公共哲学とは何か』ちくま新書  
三浦展『下流社会 新たな階層集団の出現』光文社新書  
三浦展『下流同盟』朝日新書  
加賀乙彦『不幸な国の幸福論』集英社新書